

逸題（橋本左内）

飛雨 蕭々 孤雁 鳴く

壮心 凜々 又 驚くに 堪えたり

忽ち 聞く 城裡 一声の 笛

既に 見る 門前 数十の 兵

地に 投じ 天に 投じて 左右に 開く

前を 衝き 後を 衝いて 縦横に 破る

氷刀 三尺 清風に 拭えは

千里 雲 晴れて 月 五更

飛雨蕭蕭孤雁鳴 壯心凜凜又堪驚
忽聞城裡一聲笛 既見門前數十兵
投地投天開左右 衝前衝後破縦横
冰刀三尺清風拭 千里雲晴月五更

解説 幕末、風雲急を告げる中、幕吏に追われながらも、自ら信ずるところを貫こうとする不退転の強い信念を詠じている。

語釈 ※飛雨Ⅱ激しく降る雨。 ※蕭蕭Ⅱ雨や風の音がもの寂しいさま。

※孤雁Ⅱ群を離れた一羽の雁。 ※壯心Ⅱ勇ましい心。 ※凜凜Ⅱりりしい。すさまじい。 ※城裡Ⅱ町全体の意。 ※氷刀Ⅱ氷の様に冷たく輝く刀。

※五更Ⅱ午前四時頃。

通釈 風が吹き縦横、東西に寂しく降りしきる雨の中、孤雁にも似たわが身だが、意気、意志は堅固なるは、自分ながら驚くばかりである。突如市街に聞こえる鋭い呼子の笛、はや門前に群がる数十の捕り手の姿。今捕えられてはと、捕り手達を地に、天に、左に右にさらに敢然突撃して前の敵を倒し、身を翻がえして後方の敵の虚を衝き、獅子奮迅の武者ぶりを發揮すると、敵も攻撃してこなくなつた。いつしかに雨は止み、氷の輝きにも似た三尺の刀身を清風に拭えば、千里雲晴れて、朝方の月が街を静かに照らしていた。